

公開捜査の事件  
郊外に死す

このゲームで描かれている物語、すべての名称、登場人物、事件は架空のものです。実際の人物（生死を問わず）や商品との関連は意図しておらず、そう推測されるべきでもありません。ご了承ください。



導入&カード翻訳：我孫子武丸  
データ翻訳&監修：健部申明  
編集：鷹海和秀  
DTPワーク：すぎきあきら



今年のクリーブランドの気候はとりわけ厳しい。2月は厳寒予報で、街全体が暗闇に閉ざされている。駐車場からカフェまで急いで走った。中に入ると、心地よい暖かさと挽きたてのコーヒーの香りに迎えられ、窓際のテーブルに陣取る。ブラック・コーヒーを注文し、スマホを操作しながら、スミティを待った。数分後ドアが開き、2月の冷たい空気が入ってくる。バットマンのセーターを着た若い男が、陰鬱な表情で周りを見回し、やがてこちらにやってくる。ためらいがちに椅子を引き、座りながら「おはよう」と、かすかに呟く。

「どうしてあの家に行ったのですか？」すぐ本題に入った。スミティは窓の外を見て何も言わない。

「どうしてなんです？」しつこく迫った。「何か探していたんですか？ あなたが殺したのではないですか？」

「いや、そういうことじゃないんだ」ついに返答した「ぼくは人殺しなんかじゃない」

「では、あそこで何があったんです？」

▶ 調書を取る 「QUESTIONING@601」



知人や近隣住人について訊ねる。



# #601B

「なるほど、ジョニー。あなたが真実を語っていないことは明白です。あなたは、そこで誰と会うか、きちんと分かっていました。ヤクの売人。そうでしょう？」

ジョンは椅子の上でそわそわする。そしてゆっくりと説明を始めた。

「ぼくは時々……あそこでいろんな連中に会ってたんだ [MSL]。変なちょっかいを出さなけりゃ別にどうってことはない [LSL]。確かに時々ブツを都合してはもらったけど、大きな取り引きってわけじゃない。ちょっとたしなむ程度さ。 [LSL] でも、ぼくがその話をしたってことは知られたくない。だって……分かるだろ。連中を信用しきってるってわけじゃないからさ [LSL]」

「わかりました。相手の情報を教えていただけたなら、あなたの名前は出さないと約束しましょう」

「えっと、何だか後悔しそうな気がするんだけど、協力するために来たんだもんね？」 [LSL]

思わず頬に、歪んだ笑みが浮かんだ。スミティは若く、より深刻な問題に直面しているということにまったく気づいていない。

「あいつの元締めはジョハンソンさ」 [LSL]

「スティーヴ・ジョハンソンですね？」 警察でも知られた名だ。

「うん……普段はこの近所をうろついて、金もあって問題を起こさないような連中を相手にしているんだ」 [LSL]

「わかりました。ありがとう、ジョニー。また連絡します。この町からは離れないように。そして……目立たないように。どこにジョハンソンのモグラが潜りこんでるか分かったものではありませんからね」

スミティは顔面蒼白になり、ゴクリと唾を呑みこむさまを目にして、君は満足した。

さらなる  
糸口

▶ ジョハンソンの個人ファイルを確認する  
「NAME@SteveJohannson」

▶ 売人スティーヴ・ジョハンソンを連行して  
尋問する「#612」捜査本部



ドーンビュー通り 602 番地に車を停める。庭は放置され、家じたいは裕福な地域にしては珍しいほど小ぢんまりしている。窓のひとつが、ひどく焦げていた。ローランドが言っていた火災のせいだろう。家屋の前の芝生に鑑識課長がおり、靴を拭っていた。明らかに何かを踏んだようだ。そしてこちらに気づいて手を振ってきた。

「クソみたいな仕事だよ」笑いながら君の手を握り、踏んだものを指差した。「別の班が来て、分析のために残りの証拠を持ち帰るまで、まだ少し時間がある。それまで現場を検証できるが、慎重にな」



## #602B

なかに入り、遺体があった辺りを通り過ぎる。血だまりと人の輪郭があった。暖炉付近の床は半分焼けている。椅子がひっくり返り、テーブルは移動されていた。そのテーブル上には、なかば荷ほどきされたスーツケースがある。近くのソファには何着かの衣類が置かれている。手袋をはめ、山積みになった服——ジーンズ、セーター二枚、Tシャツ数枚——を検分した。スーツケースには、まだ手荷物タグが付いている。女性は、ミシガンからバスで三日前にここに来た。他に何か重要なものがないか、部屋から部屋へと移動する。何もない。二階に上がるとドレッサーの上に写真があった。若い女性と、その祖母と思われる人物だ。「ジャドウィガおばあちゃん」との記入がある。壁には クリーブランド・キャバリアーズのポスターが貼られており、一見、男の子の部屋だと錯覚しそうになった。



さらなる  
糸口

- ▶ 火事の事件ファイルを調べる「#614」所轄署
- ▶ 近隣住人に聞き込みをする「#622」フィールドワーク



2 時間

検屍報告書は、数時間すれば所轄署とアンタレスに転送されることになっているが、少し無理を通せばもっと早く手に入れることができるかもしれない——少なくとも速報版は。とにかく試してみることにした。裁判所の門をくぐり、警備員と少し話をして、アンタレスのコンサルタントであるパイン博士のオフィスがある地下に降りる。鉄灰色の冷えた部屋に入ると、パイン博士は第一報の印刷を終えたところだった。博士はそのファイルを手渡してくれたが、表情を見る限り、何も興味深いことはなさそうだった。さらなる検査をすればもっと多くのことがわかるだろうが、時間が必要だ。君は椅子に座り、書類を開く。

▶ 検屍報告書を読む 「FILE@603」



検屍報告書についてパイン博士  
と話す



## #603B

ファイルを閉じ、パインを見つめる。

「なにか他には？」

「性急すぎるよ。これはまだ速報だ」

「何か気がついたことは？ 追試で確認するまで、報告書に記載しないことも、あるんじゃないですか？」

パインは被害者の写真をテーブルに置き、何枚かを指差した

「見たまえ。格闘し、必死で抵抗した形跡がある。強い男に襲われたとしたら、そもそも格闘すらできないだろう。彼女は華奢なほうだ」

「犯人は女性の可能性が？」

「あくまでも仮説だが……イエスだ。女か男かわからないが、最初は傷つけるのを恐れて押さえつけていただけだが、結局は発砲までエスカレートした」



犯行現場で最初に採取された証拠品は、すでにラボに到着していた。鑑識が再捜索したり、捜査官の追加要請があれば、検査対象となる証拠は増えるだろうが、今はより明確で重要な証拠から徹底的に分析されている。

6階に行き、鑑識課を通り過ぎて、ラボのオフィスに到着した。6つのコンピュータ・ステーションが、青く輝く画面で出迎えてくれた。至近の1つまで行き、メニューから科学捜査報告書を選ぶ。事件番号やアクセスコードを入力すると、すぐに資料にアクセスできる。そのファイルを印刷し、アンタレス・サーバーにデジタルで送信して、事件に取り組む班の全捜査官がアクセスできるようにした。

プリントアウトを手に帰ろうとすると、他の班のアンタレス捜査官2人とすれ違った。盗まれた時計の事件について熱く議論しており、こちらに気づいたようすはない。

エレベーターに乗って、報告書に目を通すことにする。

▶ 報告書を読む「FILE@604」





ローズ・フラワーズがいればいいがと思いながら、ノックする。幸いなことに、間もなくドアが開いた。ローズ・フラワーズは50がらみの女性で、名前に似合わず花のようなところはまったくなかった。ローズはリビングに招き、こちらの質問に答え始める。

そう、ローズは近隣住人のことをよく知っており、スーザン・ノヴァクのことにも気にかけていた。「とってもいい子だったのに、あのゲス野郎のせいでおかしくなったのよ」

「ゲス野郎とは？」

「とは、ですって？ きまってるでしょ、あの選手よ！ トム・リチャーズ！」

「ふたりは知り合いだったのですか？ 本当に？」

「もちろん！ スーザンがまだここに住んでいた頃、火事の前だけど、時折トムの車の助手席に乗っていたわ。やめなさいって言ったんだけど、聞く耳を持たなくて。トムにぞっこんで、あいつはそれを利用したのよ。あいつが怖いのは、奥さんのメリッサだけ」

「奥さんはそのことを知っていたのでしょうか？」

「スーザンは知らないと思っていたようだけど……どうかしらね」

フラワーズ夫人は、かの隣人があまり好きではないようだ。メリッサの話をするとき、その顔に皮肉めいた笑みが浮かぶのだ。ともかく話をしてくれたことに礼を言い、何か思い出したときのために名刺を置いていく。



スーザンの失踪について訊ねる



さらなる  
系口

▶ トム・リチャーズの個人ファイルを読む  
「NAME@TomRichards」

## #605B

ふと思い直し、玄関先で立ち止まって別の質問をする。

「スーザンが、この数年どこにいたか知りませんか？」

「いいえ。一度だけ葉書はもらったんですけどね。『心配しないで。何も問題はないの。元気になり次第、戻ってきて何とかするから』ってね。スーザンは、繊細でもの静かで神経質な子だった。決断するのが苦手だった。だからこそ、火事の後では逃げるしかなかったんじゃない？ 自分の命も危ないと感じたのよ」

「何を恐れていたのです？」

「両親のように死ぬことをよ」

「ふたりは一酸化炭素中毒での事故で亡くなったのでは？」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。スーザンは何か悟っていて、だからこそ姿を消したのよ」

「なるほど——最後の質問ですが、銃を所持していますか？」

「ええ、もちろん」

「どんな銃です？」

「古い45口径なの。生前、夫が購入したものです」

「ありがとうございます。これ以上のお手間は取らせません」



幸いにも、今のところ渋滞は発生しておらず、迅速に目的地に着いた。ラボに入り、エレベーターですぐ7階の弾道実験室に到達する。特殊な容器に銃を入れて5分、タバコ臭い無精髭の男がやってきて、その容器を受け取った。君も専用の実験服を着こまされ男の後についていき、検査の手伝いをする。できるだけ早く結果を知りたいのだから、こうやって制服組にプレッシャーをかけるのが最善だ。すべてのテストが終わり、プリンターから吐き出されたばかりでまだ温かい報告書を手に入れる。

銃：シグ・ザウエル P938、9mm。

所有者：トム・リチャーズ

1998年3月17日、《マーマック銃砲店》で購入。

この1週間で1回発射されている。弾は1発を除いて全て弾倉に収まっている。この銃にはSMタグが割り当てられ、更なる検証のために他部署に回される。

SM: AST76T-RTW42H

銃から採取されたかなり不明瞭な指紋。

SD: xxxxZx-x4xxx2





ドーンビュー通り 607 番地の屋敷はきれいで整然としている。運悪く、到着時には誰もいなかった。アンタレスから家主のロバート・ドックスの電話番号を聞き出し、電話で連絡を取った。ロバートによれば、妻ともども市役所に勤務しているという。

朝7時頃に家を出て、息子のパトリックを車で学校に送ってから、出勤したという。銃声を聞いたり、誰かを目撃することは無かっただろう。

「あの火事が起きてからというもの、あの家は無人の廃墟と化していて、残念ながら買い手もなく放置されています。時々不審者を見かけますがね。息子のパトリックは、誰かが裏口からなかに入るのを何度となく目撃しています。警察に通報しましたが、興味を示してはくれませんでした。最近また誰かが来たようでしたが、パトリックには、家と家を仕切るフェンスには近づかないようにと言っただけです」



## #607B

ドックス夫妻は、1998年からここに住んでいる。数年前の悲劇的な火事の日、ふたりはスタジアムにいた。隣人たるリチャーズ夫人が、試合のチケットを買ってきてくれたのだ。ご主人は運悪く怪我で試合に出られなかったようだ。消防隊がすぐ駆けつけ、危険を食い止めてくれたことに、ドックス夫妻は心から安堵している。延焼していたら、どうなっていたかと考えると、思わず肝が冷える。

さらなる  
糸口

▶ 隣人のリチャーズ夫人を尋問する  
「#616」フィールドワーク



1 時間

トム・リチャーズは、待ち合わせの時間ちょうどに現れた。クリーブランド・キャバリアーズのロゴ入りのジャージ姿だ。会議室の椅子を勧めて、システムを起動する。

「2月12日の朝8時から9時は仕事に向かっていたと証言していますね。9時前にはクイックン・ローンズ・アリーナ  に着いていた。間違いありませんか？」

「渋滞に巻きこまれて、遅刻しました。アリーナに到着したのは9時半頃です [MSL]」

「スーザン・ノヴァクをご存じでしたか？」

「ええ。ご近所さんの娘さんです……あつまり、元ご近所さんで事故で亡くなる前はってことですが…… [MSL]」

「失踪後、スーザン・ノヴァクを目撃したり連絡を取ったりしたことはありませんか？」

「いや。どうして俺が連絡するんです？ [HSL]」

「こちらは質問しているだけです。気分を害される必要はありませんよ」

「気分がいいわけではないでしょう？ キャスラってブン屋が、俺の不祥事を狙って食らいつこうとしてるっていうのに」

「記者のメリー・キャスラですか？ 心配ご無用。今のところ我々は、マスコミには何も公表していませんから」

君はそう言って少し間をとった。



# #608B

「銃は、お持ちですか？」

「ああ」 [MSL]

「どんな種類の？」

「普通の銃……拳銃だよ。詳しいことは知らない。使ったことはないんだ。コーチから念のために買えと勧められた。もう何年も前のことさ」 [LSL]

「2月12日に仕事に出かけた時、何か気づいたことはありませんでしたか？何かおかしいことは？」

「いや、何も」 [MSL]

リチャーズは玉のような汗をかいている。ここまでストレスを表出する証人など、アンタレスでも、ここしばらく見たことはない。緊張に弱いのだろうか？それとも何かを隠しているのか？

さらなる  
糸口

- ▶ 4個を消費し、トム・リチャーズの銃の押収令状を取る「#606」ラボ
- ▶ 記者を調べる「NAME@MerryCathla」



ドーンビュー通り 609 番地に居を構えていたのはブーン家だった。天候が悪いにもかかわらず、ブーン夫人は庭で忙しく働いていた。

「ちょっとお時間よろしいでしょうか？」

「もう警察に全部話したわ。銃声は聞いてません。何も知りません。あそこに住んでいた人たちのことだって知らないし。ここに引っ越してきたは2年前。もう全部話しました。何も知らないの」

「2月12日、何か奇妙なものや変わったものを見ませんでしたか？」

「いえ、何も。言ったでしょう、いつもと同じような日だったんです。あのイカれたメリッサ・リチャーズが、またもやジョギングを始めたことくらいかしらね」と左右に首を振る。「朝、家に戻る途中、道端で会ったのよ。完全に息を切らしてた。いたって元気なふうに見せたいようだけど、顔は真っ赤だったわ。イカれてるのよ。ただそれだけ」

「イカれてる？」

「文字とおりの意味よ。そう言ったでしょ。検査に来たメリッサを、義理の弟が見かけたの。弟はmetroヘルス病院の精神科で働いてるの。本当にイカれてるのよ」

さらなる  
糸口

- ▶メリッサ・リチャーズを調べる「NAME@ MellissaRichards」
- ▶metroヘルス病院に行く「#619」フィールドワーク





1 時間

コンピュータの前に座り「トム・リチャーズが2015年6月16日の試合に出ていた」という証拠を、どうやって見つけようかを考える。アリーナのカメラのことを最初に思いついたが、クイックン・ローンズ・アリーナに電話をかけると、2年以上前の記録はもうないと判明した。アリーナの担当は「チケットを扱う会社に確認したらどうです?」と提案してきた。その間、ABCの中継で流れた試合のどこかにリチャーズが映りこんでいないか、メインコンピュータで探した。別のコンピュータでは、その日のツイッター上の写真を全部流した。ファンが撮ったと思いきりチャーズの写真が見つかった。

あまり期待もせず、マグネティック・セキュリティ・ソリューションズに電話をかけ、2015年の選手用カードのデータベースを要求した。電話相手は意味が分からなかったようで、別の担当者につながれた。その男も分からず、また別の誰かにたらい回しにされる。声から判断するに、代わるたびに、どんどん若い職員になっているようだ。高校生が受話器を取るような声が聞こえたので、電話を切ろうと思った。



# #610B

「おいらなら掘り出せるよ」

通話ボタンを押す直前、そんな声が確かに聴こえてきた。

「本当ですか？」

「サーバにはなんでも揃ってる。具体的に何を探せばいいのか、言って」

「2015年6月16日、トム・リチャーズが、実際にクイックン・ローンズ・アリーナにいたかどうか教えてほしいのですが」

「OK、任せて」受話器からそんな声がした。キーボードを叩く音。そして数分後、答えは得られた。

「データベースの記録を見つけたよ。このリチャーズという男は、クリーブランド・キャバリアーズの選手だった。チームの全選手は、イベント用に発行されたカードを持ってるんだ。リチャーズのカードは一度も使われていないので、その日はスタジアムにいなかったというのが公式見解」

アンタレスのシステムでも、写真や動画のなかに、トムを見つけることはできなかった。

- ▶ 「#608」がまだ解決されていないなら、糸口カードのセットから抜き出し、ゲームから取り除く(内容を確認せずに箱にしまう)こと。以降「#608」を確認することはできない。

さらなる  
糸口

- ▶ トム・リチャーズを尋問する「#613」捜査本部



1 時間

弱く古い手掛かりを追うのは、暗闇に向かって銃を撃つようなものだ。まさに今がその時だろう。オフィスのパソコンの前に陣取り、《セーフ&エピック・ファイヤ》社の情報を確認する。当時、リチャーズ家の暖炉や換気に、いくつか問題があったのは事実だった。トム・リチャーズがバスケットボールのスター選手だったこともあり、結構なスキャンダルとなって、会社は瀕死になった。

電話を取って番号をダイヤルする。

「《セーフ&エピック・ファイヤ》のマイク・ジェラードです。御用件は何でしょうか？」受話器ごしに、疲れた中年男の声が聞こえる。

「あの、暖炉の故障について伺いたいんですが。3年前、トム・リチャーズ宅で……」

「もう、いい加減にしてくれ、クソっ！」

通話が切れる直前、そう聞こえた。



# #611B

同じ番号にダイヤルする。

「なにも話したくない!」と受話器から。

「ジェラードさん、こちらは記者ではありません。FBIです。どうか落ち着いていただきたい。我々は重要な事件の捜査中なのです」

「故障なんかじゃなかった。センサーに問題はなかった。わしは『誰かがセンサーに手を加えたんだ』と言ったのに、誰も聞く耳をもたなかった。お前ら全員、くたばっちまうがいい!」

またもや接続が切れた。

さらなる  
糸口

▶ 2個を消費し、マイク・ジェラードを尋問する「#623」捜査本部



1 時間

見つけるのに時間はかかったが、幸いにもスティーヴはマフィアのボスなどではなかった——単なる売人だ。情報提供者に何人か聞きこみをかけただけで、高校付近で確保できた。

拘留時、何も怪しいものは所持していない程度には、賢い男だった。そして今、アンタレスの取調室で、虚ろにマジックミラーを眺めていた。逮捕時、きちんとミランダ警告を読み上げた。すぐさま尋問を始める。



## #612B

「ジョハンスンさん。あなたやあなたのお友達は、ドーンビュー通りで麻薬の売買をしているところを目撃されています。そのことについて何か釈明はありますか？」

「警察には何度も説明してるんだが、オレたちは健康管理をしてただけさ [LSL]。あそこは何たって空気がいい。クリーブランドーだ [LSL]。おせっかいな隣人は、オレたちがうろついてるだけで気に入らないんだろうよ [MSL]。あいつらはいつも、単なる通行人ですら見張ってやがるのさ」

「2月12日、ドーンビュー通り602番地にいましたか？」

「いんや [LSL]」

「そこにいた可能性のある人物を知りませんか？」

「近所の子供らが、入りこんでいたんだろうさ」

「スーザン・ノヴァクの殺人について、何か知りませんか？」

「殺人事件だったのか？ 初耳だな [LSL]。いいか、よく聞けよ。こんなクソみたいなことのために、くだらん真似をするのはやめとけ。あの界限はオレもお気に入りだ。お前らに疑われるようなことなんかしてたら、こんなところにはいられないだろ——もう仕事に戻ってもいいかな？ [MSL]」

拘留し続ける理由はなく、スティーヴ・ジョハンソンは釈放された。もっとも、いつでも簡単に逮捕できる。



1 時間

トム・リチャーズは、幽霊のように青ざめてアンタレス本部にやってきた。壁のスクリーンでは、映像が明滅している。事件現場の回転映像、事故現場の証拠写真、そして2015年のNBA決勝戦のようす。

さあ、尋問を開始しよう。



## #613B

「2015年6月16日の試合に臨席していたと証言していましたね」

「ああ [MSL]」

「電子チケットの記録を確認させていただきました。あなたがスタジアムにいたという公的な記録は存在しません。アリバイは確認できませんでした。2015年6月16日、どこにいたのか教えてもらえませんか？」

「そこにいたんだよ！ カードを家に忘れただけさ。みんな俺のことを知ってるから、顔パスで入れたんだ。だからカードに記録がなくても、おかしくないだろ？ [HSL]」

「2015年6月、ノヴァク夫妻が死亡した火事と同時刻にあなたはカードを忘れ、今度は娘のスーザン・ノヴァクが殺されたのと同時刻に交通渋滞で遅刻したというわけですか？」

「スーザンとは知りあいだ……友だちだったんだ [HSL]。死ぬ前の日、俺に会いたいと手紙をくれた」 [LSL]

「あなた以外、そのことを知っている人はいましたか？」

「いや。誰も知らないと思う [MSL]」

「『思う』というと？」

「妻は時々、俺の携帯を盗み見していた……疑り深いんだ」

「あなたがスーザン・ノヴァクを殺したんですか？」

「いや、関係は持ったさ！ でも、それが問題なのか？俺だってスーザンが好きなんだ。絶対に傷つけたりなんかしない！」 [MSL]

# #614

所轄署



2 時間

この時期になると、警察署のメインホールは、外から運びこまれた雪や泥で、そこらじゅう汚れてしまう。立ち寄って、ドーンビュー通り602番地で発生した2015年の火災のファイルを手に入れよう。

▶ファイルを読む「FILE@614」





公園の向かいの小さなカフェで、消防司令のサミュエル・クロッパーと落ち合うことにした。席につき、コーヒーを注文する。10分後、肩幅の広い日焼けした50代の男性がやってきた。雨に濡れて重くなったコートを、椅子の上に放り投げた。座るよう促す。

「電話でお伝えしましたが、ドーンビュー通りの火災について知りたいのです。煙を吸って夫妻が死亡し、娘さんが行方不明になりました。あなたは消火活動の責任者官でしたね？」

「ああ、おれは例の試合を見てたんだ。地元のチームがNBAの決勝戦に出てたんでね。忘れられない夜だよ。クリーブランドじゅうがテレビに釘付けで、車泥棒さえ休みを取ってたっていうのに」

「夫妻は有毒ガスを吸いこんだそうですが、格別犯罪の疑いはなかったと？」



## #615B

「そう見えたね。掘り下げなきゃならない状況証拠もなかった。何週間か前には、隣人のリチャーズ家の換気ユニットにも問題があったしね。リチャーズ夫人から報告を受けたんだ。そのせいで、例の暖炉会社は倒産しかけた。たしか《セーフ&エピック・ファイヤ》だったな。数多くの問題を抱えてた。とはいえそれは、単なる偶然だろうから気にしなくていい。結局は、出場の何日か後には、不幸な事故ってことで片付けられた。あのときは著名なスポーツ記者のメリー・キャスラが、嗅ぎまわってたな——おれまでインタビューを受けたよ。結局、メリーがネタをものにしたかどうかはわからない。で、何がどうしたんだ？ なぜ今ごろそんなことを訊くんだ？ 何か新しい事実でも浮上したのか？」

「行方不明の娘が見つかったようです」

「ほう。これはいいニュースだな」

「死体となって発見されたのです」言いながら立ち上がる。「名刺をお渡ししておきます」礼を述べ、支払いを済ませ、カフェを後にする。

さらなる  
系ロ

- ▶ ジャーナリストを調べる「NAME@ MerryCathla」
- ▶ 暖炉会社《セーフ&エピック・ファイヤ》に連絡する「#611」捜査本部



ドーンビュー通り 616 番地の屋敷は、広く整然としていて清々しい印象である。玄関に近づくと、なかから犬が吠えた。ノックする。スポーティな服装の中年女性がドアを開け、その隣では、小型犬が歯をむき出しにしていた。君は、隣の家で起きた殺人事件に関連して、いくつか質問をしに来たと説明する。

「調べによると、殺人のあった時刻、あなたは家にはいなかったようですね」所轄署からの報告書をめくりながら会話を始める。

「夫がアリーナに仕事に行った後、私はジョギングに出ました。戻ったのは9時過ぎです」

「銃声を聞きませんでしたか？」

「いいえ」

「午前中、何か不審なことに気づきませんでしたか？」

「いえ、いつもと同じような日でした」

「ひとりで走るんですか？ どなたかそれを証明できる人はいませんか？」

「家の裏側の、あのあたりを走るんです」と裏手を指差した。「あのへん一带はうちの土地で、ただの野原、自然、泥それに雪でいっぱい。ご自身の目で確かめられたらいかがですか？」メリッサは窓際まで進み、レースのカーテンを揺らしながら言った。「実はあの日、609 番地のベティ・ブーンに会いました。ベティが証人になってくれるわ。でもこれって、私が容疑者ってことかしら？」

「ご安心ください。付近住民全員に話を聞いてまわっているのです。ご協力感謝します。また何か思い出したら、ご連絡ください」言いながら、君は名刺を渡した。



## #616B

敷居をまたぎ、足下にもぐりこもうとする犬を踏まないようにしながら、もう一つ質問をする。

「銃を所持していますか？」

「持ってないわ。変なこと訊くのね。夫なら持っているけど」

「モデルを覚えていますか？」

「シグ・ザウエル P938 です。夫はいつも自慢しているの」



「誰に言われたんです？」

「市長のトニー・ミロスさ。この辺りじゃ一番の大金持ちの、ダン・ギルバートの義理の弟だ。証拠は押さえられなかったが、目撃者たちは実際には自宅にいなかったか、何らかの理由で嘘をついてる。例えばだ、ええと、リチャーズんとこの尻軽の名は……メリッサだったかな。尋問のあいだ、ずっとはぐらかされっぱなしで忍耐を試されたね。試合を見ていたかどうかすら、定かじゃない。最初は犬たちの散歩をしていたと言っていたのに、後から頭痛がひどくて家から出ていないと証言を翻した。メリッサは嘘を、犬どもはクソを垂れ流した。そこらじゅうでね。そういやあ、誰とでもイチャつくようなカミさんが、いつ旦那に捨てられるかって、署で賭けをしたもんさ」

「メリッサは浮気をしていたんですか？」

「さあてね？ 遺体はふたつ。検屍官は、一酸化炭素による中毒死を宣告。市長は『もっと重要な案件に集中するために、この件を終わらせろ』と要請。まあ、近隣に聞き込みに行くんだな。連中は何だって知っているんじゃないか？」



事故現場について訊ねる



さらなる  
糸口

- ▶ 市長の個人情報を調べる「NAME@ TonyMilos」
- ▶ メリッサの個人情報を調べる「NAME@ MellissaRichards」

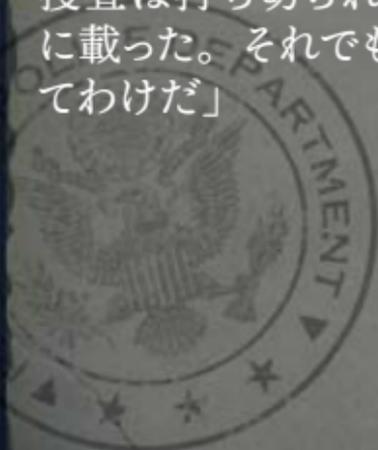
# #617B

「家の中で、気になることはありませんでしたか？ 何か不審なこととか？」

「何も。台所には2人分の夕食の残りが、絨毯には死体があった。極めてロマンティックな夕べだったようだ——意味は分かるだろう？」

「報告では、裸で絨毯に横たわっていたとありますね」

「そうだ。絨毯でイチャついてたんだな。家にいたのはふたりだけ。その夜は寒かったから、ロマンティックなことでもしたくなっただろう。それで暖炉に火を入れた。飲み過ぎて床で眠っちゃった。それでしっぺ返しをくらったってわけだ。とはいえ、6月に暖房とは、ちょっと奇妙な気はするな。それにしても、娘さんが行方不明になっていたとは、あの時は気づかなかった。試合を見にどこかに行っていたのかと思っていた。それから捜査は打ち切られ、娘さんは行方不明者リストに載った。それでも世の中は変わらず動いてるってわけだ」





メリー・キャスラは、ダウンタウンのカフェで会うことに同意した。君が到着すると、記者はすでになかにいて、コーヒーをすすりながらノートパソコンで作業をしている。近づくと、メリーは微笑んでパソコンの画面を閉じた。長い灰色の髪はポニーテールに結ばれ、スポーティな服装をしている。

「何かご用でしょうか？」

「トム・リチャーズの事件のことです。隣人が2015年6月に火事を起こしました。覚えていますか？」

「ええ、かの隣人は、例の試合中に亡くなった。悲しい話ね」

「トムのことを——警察のファイルや彼自身の証言ではわからないことを教えてもらえませんか？」

「とても面白い男よ。他の若いバスケットボール選手と同じように、華やかな生活を送っていた。上流社会を楽しみ、市長や市内の裕福な実業家との親交があった。奥さんがいるにもかかわらず、しばしば美しい女性たちに囲まれて、一日中パーティーをしていたの。でもキャバリアーズが決勝戦で敗れたあの夜、トムは変わった。あの日以来すっかり落ち着いて、前みたいに派手に遊ぶことはなくなったの。まだパーティーには行くんだけど、いたって大人しいもので、いつも奥さんと一緒だったわ。」



# #618B

「今のトムはどんな人物なのですか？」

「ジュニアチームでアシスタントコーチをしてるの。すっかり落ち着いたのよ。メディアへの出演も格段に減ったわ。今は奥さんのメリッサの時代。トムのキャリアが終わってからこっち、脚光を浴びはじめたの」

「あの時期から、何か気になったことはありますか？ 何か奇妙なことは？」

「敗北がどれだけ彼を揺さぶったかって話ね。試合後、チームがファンに感謝の言葉を述べる際にも、トムは表に出てこなかった。数日後にインタビューしたんだけど『VIP ルームに閉じこめられていて、フィールドに出ることができなかった』と語ったわね。あの日、誰もトムの姿を見ていなかった。とてもショックを受けていたのね」

さらなる  
糸口

- ▶ トム・リチャーズの個人情報を調べる  
「**NAME@TomRichards**」
- ▶ メリッサ・リチャーズの個人情報を調べる  
「**NAME@MelissaRichards**」
- ▶ トム・リチャーズのアリバイを調べる  
「**#610**」捜査本部



メトロヘルス病院はかなりの規模で、問題の病棟を探し出すのにも時間がかかったうえ、患者や製薬会社の営業に捕まっていないスタッフを見つけるのも骨だったが、うまいこと日頃から警察と連携しているスタッフを捕まえることができた。そして15分後、ブーン夫人の義弟にたどりついた。メリッサの主治医ではないため、患者と医師間の守秘義務に縛られていないのは幸運だったが、検査結果を知る権限はない。

それでも、メリッサがここで検査を受けたのは何年も前だったことを教えてくれた。気難しいティーンエイジャーで、学校で「友達」をいじめたり辱めたりする、典型的なプロムの女王様だった。目立っていたので覚えていたそう。すべてを見下していたが、見た目には気を遣っていたし、かなりの美貌だったため、何とかうまくやってきたのだ。

さらなる  
糸口

- ▶ ④ 2個を消費し、メリッサ・リチャーズのカルテの閲覧許可を得る



## #619B

メリッサの検査結果と、担当医師の所見が記入されたファイルを手にする。アンタレスの専門家に託し、次のような結論に達した。メリッサ・リチャーズはコントロールフリーク（支配欲の権化）で、慎重に選びぬいた少人数の友人を監視下に置いていた。暴力傾向はなかったが、時折怒りを制御できないという問題があった。特に物事が自分の思い通りにいかない場合、複数の問題行動をおこした。しばしば他人——メリッサが友人と呼ぶ相手——の幸せより、自分の幸せを優先した。そこで心理療法を勧められていた。両親は 遺伝子検査にこだわっていた。自分たちが保護者失格だと思いたくなかったのだろう。

SDNA : THY675-TK82WP



ジェームズ・ルークタウンと面会の約束を取りつけた。背が低く細身の男だ。署で待ち合わせ、近くのカフェに行った。元警官には見えなかったが、席につくとコーヒーとドーナツを注文した。長年の習慣はなかなか抜けないものだ。

「2015年に、あなたはドーンビュー通りでの死亡事件の捜査を担当しましたね」

「ああ。捜査を主導したよ。2015年6月16日は、キャバリアーズにとっても重要な日だったから、よく覚えている。あれは悲惨な事故だった。犠牲者は一酸化炭素中毒で亡くなった。2日後、捜査打ち切りを命じられたよ」

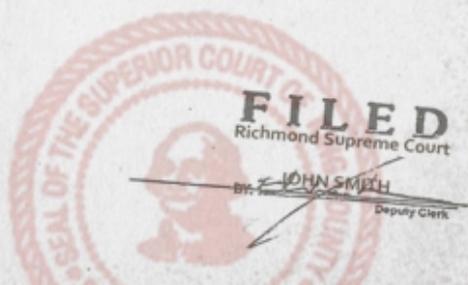
▶ 続けて「#617」を読む





駐車場、関門、迷路のような廊下を通り、ようやく公文書館までたどり着く——これが標準的な手順だ。受付で必要とされる書類を提出し、数分後、必要な資料をすべて入手できた。

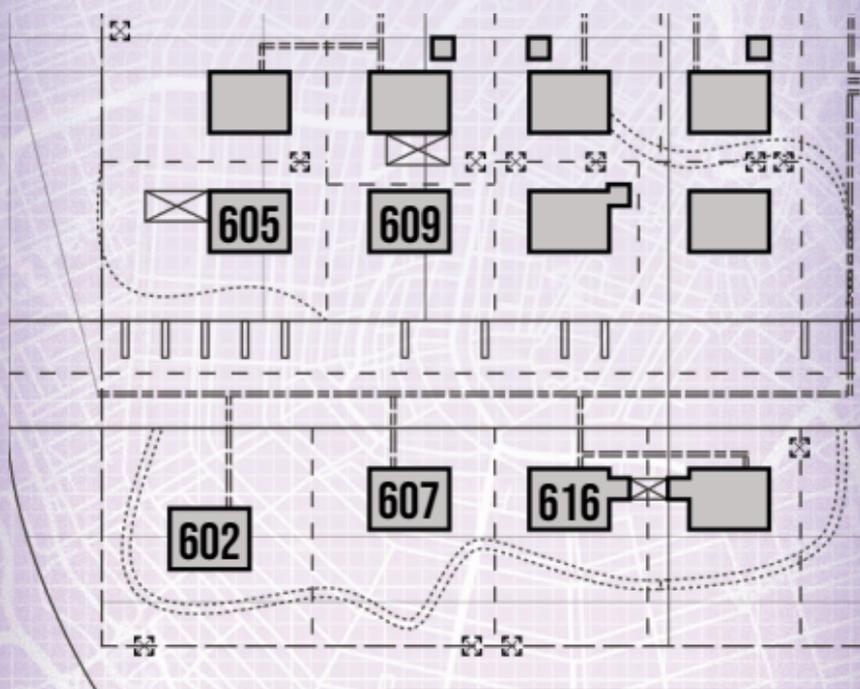
▶ 資料を読む「FILE@621」







ドーンビュー通り 602 番地からは、近隣のいくつかの家屋を見渡すことができた。システムにログインして近隣の情報を集める。アンタレスのシステムを使えば、付近の基本的な見取り図を、すぐに確認できた。



近隣エリア図面

さらなる  
系ロ

- ▶ 605 番地の住人と話す「#605」フィールドワーク
- ▶ 607 番地の住人と話す「#607」フィールドワーク
- ▶ 609 番地の住人と話す「#609」フィールドワーク





1 時間

ふたりの警官がジェラードをしょっぴき、アンタレスの取調室の椅子に座らせる。

「ご足労、恐れ入ります」とうなずくと、警官はその場を去った。

「ジェラードさん 我々は極めて重要な事件の捜査中なのです。あなたは誤った認識で、こちらを無視されていたのかもしれませんが。我々は、ここでお約束いたします。この問題について、我々はあなたの証言を重んじ、きちんと受け止める所存です。最初から話してもらってもよいでしょうか？」

マイク・ジェラードは、大きく深呼吸をした。

「あの頃、弊社は立ち上げたばかりで、相当な資金がつかまれておった。わしは日ごと夜ごと、部品の選定に奔走していた。うちの最高のモデルが、何ら手を加えていないのに壊れるなんて、ありえんことだ。なのに突然ドカン、だと？ 1ヶ月足らずで2回の故障。最初はキャバリアーズの選手の家だった。何が問題なのか、誰かが設置を失敗したのか、わし自ら確かめに行ったとも。そこで問題の装置を交換して、故障したほうを保管しておく。今も持っておるよ」

「ノヴァク夫妻の死については、いかがでしょう？」

「くそっ。こんちくしょうめ！ 何もかも裏目だ。不幸にも最悪のタイミングで、また故障が起きた。そのせいで会社は倒産寸前だ。今でもその借金を返すため、しゃかりきに頑張っておる。どちらも同じ機種だった。卸売りだったから、あそこらじゅうの全家屋に設置されていた。それが全部返品だ。じゃが前にも言ったように、何者かが手を加えなければ、故障なんてするはずはない！ 調査をしたんじゃが、何も見つからなかった。捜査が打ち切られたとき、その部品は頼みこんで返却してもらったよ。何度調べても、なにも見つからなかった。じゃが、もう一度言わせてほしい。外部からの工作がなければ壊れることなんてないのだ」



二つの部品を研究所で検査する



## #623B

ラボから、リチャーズの自宅にあった部品から指紋が採取されたとのメモが送られてきた。

SD : 867YZ2-M4Y862

別の部品では、ほとんど指紋が拭き取られていた。とはいえ、部品が分解されていたことは明らかだ。その内側から、不完全だが指紋を採取することができた。

SD: 8x7Yx3-xxx8x2